

郡里廃寺跡の調査成果と史跡保存の経緯

美馬市教育委員会 生涯学習課

木本 誠二*

要旨：白鳳時代創建とされる県内最古の寺院跡である郡里廃寺跡の保存をめぐるこれまでの経緯と現在の調査成果の概要を紹介。また郡里廃寺跡と周辺に所在する段の塚穴や郡衙跡推定地などの関連遺跡などから、郡里廃寺跡の歴史的位置付けについて考える。

キーワード：郡里廃寺跡，段の塚穴，段の塚穴型石室，郡衙，古墳から寺院へ

1. はじめに

郡里廃寺跡は、美馬市美馬町の東部にあたる旧郡里町に所在する寺院跡である。これまでの調査で白鳳時代に創建された県内最古の寺院跡であり、塔や金堂、寺域の一部が明らかとなっており、四国の古代史解明に欠かせない重要な遺跡であることから昭和51年に国史跡に指定されている。

これまで郡里廃寺跡については、創建年代の古さに注目があつまり、周辺に所在する関連文化財の中での位置づけが充分になされているとは言い難い状況であった。しかし、この地域には、郡里廃寺跡の他にも多くの文化財が残り、それらは互いに強い関連性をもっている。そこで、ここではあらためて郡里廃寺跡の現在に至る経緯や遺跡の概要を紹介する。そして、現時点では調査・資料の不足は否めないものの周辺の文化財と関連させて郡里廃寺跡の位置づけを考えてみたいと思う。

2. 郡里廃寺跡のこれまでの経緯

郡里廃寺跡は、もともと立光寺跡と呼ばれていた。これは、「立光寺」という七堂伽藍を備えた大寺院が存在していたという地元の伝承（『郡里町史』

1957）により名付けられたものである。また、嘉永4年の検地帳に立光寺という地名の記録があることなどから、立光寺という寺院がある時期に存在していた可能性があるが、それがいつ頃の寺院であるかが特定できずにいた。

伝承にある立光寺跡が古代寺院であることを最初に想定したのは地元の郷土史家達である。昭和前半の美馬郡では、笠井新也氏の影響もあって、郷土史の研究が盛んであり、多くの遺物が採集されている。現在郡里廃寺跡指定地となっている大銀杏の周辺で採集された瓦の特徴等からここには白鳳時代の寺院跡が存在し、それが地元の伝承にある立光寺跡の可能性があると『郡里町史』でも紹介されている。

昭和38年には、ここで採集された瓦を石田茂作博士に鑑定を依頼、翌年には同氏によって簡易現地調査が行われた。その結果、大銀杏の南にあった六角堂の土壇が塔跡、その西方に金堂跡がある法起寺式伽藍配置の寺院であり、その寺域は約1町四方に及ぶと想定され、あらためてこの遺跡の重要性が判明した。

しかし、その後郡里廃寺跡は消滅の危機にさらされることとなる。当時この地域で推進していた八朔栽培のため町内の多くの場所が八朔畑に開墾されて

* 美馬市教育委員会 生涯学習課

おり、それが当地にもおよび、寺域推定地内がブルドーザーで開墾されはじめ、さらに寺域を横断する県道の建設計画がもちあがった。そのため、この遺跡の内容を明らかにし、開発から遺跡を護るために昭和42・43年に2次にわたって発掘調査が行われた。この調査では、塔跡、金堂跡の位置が判明し法起寺式伽藍配置であること、寺域が東西94m、南北120mであることが確認された。特に塔跡においては、心礎が基壇面の下に置かれる地下式の構造であること、塔には2時期分の遺構があり、現在基壇面上に残る四天柱礎は、創建時ではなく建て替え時のものであることが明らかとなるなど貴重な成果が得られている。そして、この調査成果に基づいて昭和51年に国の史跡に指定され、遺跡の保護が確約された。

なお、国の史跡に指定される際に遺跡の名称が「立光寺跡」から「郡里廃寺跡」へと変更されている。これは、「立光寺」は伝承のみであるため、存在が確実ではないこと、また仮に存在していたとしてもそれが古代の寺院跡のことであるとは限らないため、広域地名の「郡里」をとって名称変更したものである。

調査当時は、四国最古の古代寺院の発掘であったことや、発掘調査自体が珍しいことなどもあり、地元住民の大きな関心と呼んだ。しかし、その後約20年間は郡里廃寺跡の保存・活用に関する大きな動きもなく、調査当時であった郡里廃寺跡に対する関心は次第に薄れつつあった。このような状況の中で郡里廃寺跡の保存についての活動をはじめたのが「美馬観光開発期成同盟会」という住民団体である。同会では、美馬町の地域発展のため、地域に存在する文化財の調査や学習を行い、その中で郡里廃寺跡に着目した。郡里廃寺跡は美馬地域の古代の繁栄の様子を今に伝える象徴的な文化財であり、地域の誇りであると考え、より確実に保存管理するために、同会では募金をあつめ国史跡指定地を買収する計画を立てた。この動きを受け、行政（美馬町）としても「寺町周辺整備構想」という郡里廃寺跡、段の塚穴、寺町を一体的に整備する歴史公園整備計画を立ち上げた。計画立案後は美馬町の主要施策の一つとなり町を挙げて事業を進めてきた。平成6年から国の補助金を受けて郡里廃寺跡の史跡公有化事業を開始。

公有化は地権者・地元住民の理解もあって順調に進み、20,000m²を越え、約40筆にも及ぶ広大な指定地も平成15年には約97%の公有化が完了した。平成16年には公有化完了間近ということで整備計画を具体的に進めていくため、「郡里廃寺跡整備検討委員会」が発足し、その指導の下で整備事業を進めることとなった。

平成16年度末には、隣接する2町1村と合併し新しく美馬市が誕生したが、合併後も郡里廃寺跡についての事業計画を継続することが認められ、現在、整備に必要な情報収集のための発掘調査を進めている。事業計画では、平成22年度までの6年間の発掘調査によって整備に必要な情報を収集し、平成26年度に整備工事完了予定としており、郡里廃寺跡の周辺にある関連文化財と一体的な活用ができるよう整備・活用計画を検討している。

3. これまでの調査成果

郡里廃寺跡の発掘調査は、石田茂作博士や郷土史家達による簡易調査を除いた正式なものは昭和42・43年の遺跡内容確認調査と、平成17年度から平成20年度までの史跡整備を目的とした調査の6次に及ぶ調査が行われており、次第にその遺跡の内容が明らかになりつつある。但し、現在の史跡整備を目的とした調査はまだ継続中であり、調査記録の検討も完了していない。そのため、ここではこれまでの調査成果の概要の紹介にとどめる。

塔跡…寺域の中央の東側の昭和42年まで六角堂の基壇として利用されていた土壇が郡里廃寺跡の基壇の残存部である（図1）。基壇上の表土直下は黄褐色の基壇築成土がみられ、そこを掘り込む形で四天柱、心柱の柱穴が確認でき、柱穴内には根石が詰まっている。現在基壇面上に残る二つの礎石は、柱穴との位置関係から、北東隅の礎石が原位置をとどめており、北西の礎石跡は若干移動している。四天柱跡に囲まれた心柱の柱穴内に充填されている根石をはずすとさらに地下に平面八角形を呈する土坑が存在し、その床面には中央に舍利孔と思われる小孔を持つ心礎が存在する（図2,3）。心柱跡が現基壇面上と地下の二面で確認できることから、塔は少なくとも一度の建て替えが行われている。現基壇面上で確



図1 塔跡全景 (北西から)

認できる礎石や柱穴は再建時の遺構である。現在までに確認された柱穴の配置から再建の塔は、中の間が2.3m、脇間が2.1mの約6.5mに復元できる。創建時の遺構は基壇下に残る心柱跡のみであるため、詳細構造は不明であるが、心柱は柱穴の形状から断面八角形で心柱の周囲に腐蝕防止のための根巻板の痕跡がのこる保存状態の良好なものであった。

基壇の周囲はこれまでの間に大きく削られているが、表土層直下に薄く基壇土が確認できる。基壇東側は大きく削られており、基壇の端を捉えることは困難であるが、西側と南側で旧表土層を浅く掘り込んだ掘り込み地業の跡が確認できる。これにより、塔基壇の規模は一辺約11.5mに復元できる。

金堂跡…塔の西に位置する。塔跡が現地表面から約80cmの高低差をもって存在するのに対し、金堂跡では周囲の地表面と全く高低差がみられず、これまでに大きく削られている。そのため、金堂跡では礎石やその根石などは全く確認できない。しかし、表



図2 塔跡心礎検出状況

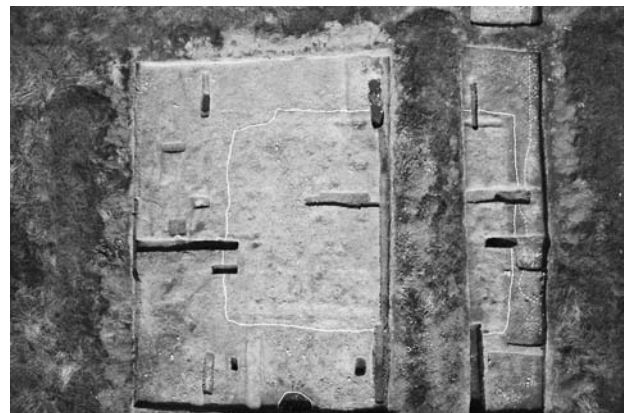


図4 金堂跡全景



図3 塔跡心柱跡



図5 金堂跡基壇土層断面

土直下には周囲とは明らかに異なる橙色の粘土が一定範囲に広がっており、これが金堂基壇の最下部の残存であると思われる（図4）。この粘土の分布範囲は一部欠損するが、ほぼ南北約12m、東西約15mの長方形を呈しており、特に南北端では掘り込み地業の可能性のある浅い掘り込みも確認できる（図5）。そのため現時点では、この粘土の分布範囲を建物基壇とし、これまでに郡里廃寺跡から複数の鴟尾が出土していることや、塔との位置関係からこの遺構を金堂跡の基壇であると考えたい。

講堂跡…塔と金堂の中間の北方、現在大銀杏がある付近に位置することが想定されるが、これまでの調査では全く確認できない。しかし、想定位置の一部である銀杏の西側の調査の際には多量の瓦の出土があったことから、周囲に何らかの施設が存在した可能性がある。

回廊跡…1・2次調査では、塔の東方や金堂西方で石敷状の遺構が確認されており、これが回廊の痕跡と考えられていたが、石敷状遺構の延長地点を含め、その他の地点では全く確認できない。また、石敷状遺構が伽藍中軸に対し左右対称でないことや、金堂と寺域西端の間が狭く回廊を置くことが不自然であることから、回廊の存在自体を見直す必要がある。

寺域の四至…寺域を区画する遺構として土塁状の遺構が確認されている。特に寺域の西では明瞭な土塁状の遺構が確認されている。この土塁は底辺約3m、上端80cm程であり、両側に多量の瓦を含んだ浅い溝が伴う（図6）。瓦の多くは土塁上からの転落と思われ、土塁の上には、瓦を用いた塀が存在してい



図6 西外郭塀跡検出状況

た可能性がある。寺域の東側では西ほど明瞭ではないが同様の遺構が確認されており、それにより寺域の東西範囲は約100mとなる。寺域の南北については、現在までに明瞭な遺構が確認されていない。但し、南限については、南門推定地において石敷遺構が確認されており、周囲の地境などと併せて考えると、寺域南北範囲は約120mと推定される。



図7 段の塚穴型石室（海原古墳）



図8 段の塚穴型石室（段の塚穴太鼓塚古墳）

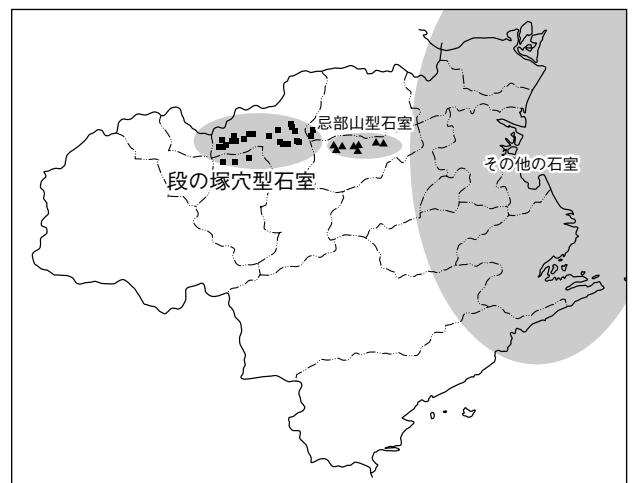


図9 徳島県の横穴式石室分布

4. 郡里廃寺跡の周辺の遺跡

郡里廃寺跡が所在する美馬市美馬町周辺は、古墳時代後期～律令期にかけての良好な遺跡が数多く分布しており、その遺跡の内容は、阿波国府周辺を凌ぐほどである。そのため、阿波国には、元々文献から確認できる粟国と長国のほかに、記録にはないが美馬国とでもいうべき国が存在していたという阿波三国説が提唱されたこともあった（『郡里町史』1957）。阿波三国説の是非は別として、この説の根拠となった遺跡は、郡里廃寺跡が建立された背景を物語るものでもある。

まず古墳時代について郡里廃寺跡の周辺を広くみると、横穴式石室の玄室の天井を斜めに持ち送って

ドーム状にする特徴的な石室である「段の塚穴型石室」をもつ古墳が数多くみられる（図7, 8）。現在確認できるものでも25基、既に消滅したものや未発見のものを考えると相当な数が存在していたと思われる。この段の塚穴型石室の古墳は石室構造が特徴的なだけでなく、分布状態に特徴がある。この種の石室を持つ古墳は、ほぼ旧美馬郡の吉野川流域に限られて分布する極めて地域色の強いものである（図9）。この古墳の分布状況は、古墳時代後期（6世紀後半）にはこの地域に一定の地域的まとまりが形成されていたことを示唆するものであり、この分布範囲が後の美馬郡の範囲と重複することは、古墳時代後期に形成された地域的まとまりが、律令国家体制の中で美馬郡となっていったことを想像させる。また、こ



図10 郡里廃寺跡周辺の文化財

の古墳の中には石室全長約13mの県内最大の横穴式石室を持つ段の塚穴の太鼓塚古墳があることから、ここに居住した集団が阿波国内でも有数の勢力を有していたようである。

次に郡里廃寺跡と同じ古代の遺跡については、現時点では明確に確認されていないが、周辺をみると地割りや地名などから当時の状況を推測できる要素がある。郡里廃寺跡付近では、撫養街道が逆L字の階段状に折れ曲がる。これは条里地割りの影響によるものと思われる。また郡里廃寺跡の名称の由来ともなっている「郡里」の地名は、郡の役所である郡衙が置かれた土地にちなむ地名であり、周辺に郡衙の存在が想定される。郡衙の遺構などは未確認であるが、地割りや地名などから笠井新也氏や羽山久男氏などがその位置を推定しており、それぞれ推定地は異なるがどちらも郡里廃寺跡の近隣地区を想定している。また、「駅」「馬次」の地名も郡里廃寺跡の周辺に残っているが、これは古代の交通の要衝である駅家に関連する可能性がある（この地名は撫養街道の分岐点でもあるため、撫養街道に関連する地名の可能性もある）。このように郡里廃寺跡周辺には、現在明確な遺構こそ確認されていないが、条里地割り、郡衙、駅家など古代の郡の中心地の要素が良く残る地域であり、この地が当時美馬郡の中心地であった可能性は非常に高い。そして、郡衙の近くに郡里廃寺跡が存在するという事は、この寺院が郡を治めた氏族の氏寺として建立されたことを想像させる。

このように、郡里廃寺跡の周辺をみると、古墳時代からかなりの有力氏族が居住しており、古代においては、郡衙が置かれた美馬郡の中心地であったことが伺える。また、段の塚穴と郡里廃寺跡が地理的、時間的にも非常に近い関係にあるということは、両

者が密接な関係にあり、古墳時代に段の塚穴型石室の古墳を築造していた集団が、美馬郡を治める郡司となっていたことを示唆していると思われ、古墳から寺院へと移行していく過程を考える上で非常に興味深い事例である。そして、この郡里廃寺跡と段の塚穴の両者に密接な関係があったからこそ、阿波国においていち早く本格的な寺院である郡里廃寺跡を建立することが可能であったと考える。

5. おわりに

郡里廃寺跡は、徳島県最古の寺院跡であり、遺跡自体も国史跡に指定されている重要な遺跡である。しかし、この遺跡の持つ本来の価値は、周辺の文化財との関連の中で見えてくるものである。郡里廃寺跡は、美馬郡を治めた氏族の建立した氏寺であり、地方の郡衙所在地の様相を今に伝えるものの一つと考えられる。現在、これら周辺の関連遺跡等については十分な調査が行われていないが、郡衙や段の塚穴型石室の古墳など、今後調査を行えば良好な結果が期待できる遺跡が多くある。これらについては、現在行っている郡里廃寺跡の整備事業を契機として、古代に栄えた美馬の歴史が明らかとなるように、調査研究を進めていき、将来的には郡里廃寺跡や段の塚穴、郡衙跡などの一体的な活用を図っていきたい。

文献

- 郡里町（1957）：『郡里町史』。
- 美馬町教育委員会（1968）：『立光寺跡の発掘調査』。
- 美馬町教育委員会（1969）：『阿波・立光寺跡調査概報』。
- 美馬町（1989）：『美馬町史』。
- 美馬市教育委員会（2006）：『郡里廃寺跡第3次調査概要報告書』。
- 美馬市教育委員会（2007）：『郡里廃寺跡第4次調査概要報告書』。
- 美馬市教育委員会（2008）：『郡里廃寺跡第5次調査概要報告書』。